

母校訪問から見る新人看護師の成長

箱根病院
看護部長
山岸 利恵子

新人看護師たちが入職し8か月が経過した。病院の環境にも適応しつつあり、いきいきと看護している。おそらく始めは看護師としてのスタートラインに立つ緊張と不安や、これからの希望など複雑な心境でいっぱいだったに違いない。しかし今では、誰よりも明るい笑顔で患者と向き合うようになっている。

箱根病院では入職して6か月目のフォローアップ研修（振り返り）が終了した後に、卒業した大学や看護学校を訪問し、恩師に近況を伝える母校訪問を行っている。新人看護師には6か月間の振り返りを恩師に話し自己の看護を考える機会とするという目的を伝え、自身で恩師にアポイントを取って訪問に出かけるよう指示している。訪問後に提出される報告書は、新人看護師が母校訪問を通して感じた様々なことで溢れているが、次のように5つに分類できた。

「学生時代から現在までを振り返り、成長を実感できた」：母校までの道や職員室等を懐かしく感じた、学生時代を思い立ち初心に戻ることができた、6か月間の歩みを話すと先生方が成長を喜んでくださり、改めて自分でも成長を再確認できたなど。

「社会人であり看護師である自己に気付いた」：先生方の話しが感覚的に理解できるようになった、社会人としての責任が出てきた、顔が凛々しくなったと言われたなど。

「今後の課題や目標の再確認ができた」：振り返ることで自分の足りない部分や、更に成長するために必要な知識や技術が明確になった、解剖生理が重要であることを先生と話して再確認することができた、看護師としての目標を先生に意思表示することができたなど。

「支援者への感謝の心がわいた」：先生方が笑顔

で迎え歓迎してくれた、時間を設けてじっくり話しを聞いてくれた、成長を喜んでくれたことに対する感謝、指導してくれる先輩看護師への感謝、援助させていただいている患者への感謝など。

「箱根病院の一員として自覚や愛着がわいた」：箱根病院の魅力、そして日々取り組む難病看護の魅力を再度実感した、先輩たちの丁寧な指導と日々の看護の大変さの中にある優しさなどを先生に伝えられた、箱根病院の一員として先生と話しができたなど。

新人看護師を対象とした研究では、新しい環境で仕事をする不安や、仕事上の疑問を抱え、体調不良や慢性疲労などの負担から労働意欲の低下を来していると言われている。また、新人看護師の職務ストレスは、能力についての不安、職場の人間関係への緊張、低い自己評価であり、多くのストレスから、離職について考えながら看護業務を行っているという報告もある。

学生時代を知る恩師に卒業後の自分の姿を語り、看護師としての成長について称賛を受ける母校訪問の経験は「成長している自分」を認識する大切な機会と思われる。また、職業継続に必要なモチベーションの維持や目標の保持、そして周囲から受ける支援の実感も重要である。何より経験を通して、就職先として選んだ病院の看護に魅力を感じ、それを他者に伝えられ、病院の一員としての自覚をこの時期に感じられることは、組織への愛着心の萌芽と言える。新人看護師を含め若い看護師たちは、当院の将来の看護を担う重要な存在であり、長くキャリアを積んでほしいと望んでいる。短い期間にこれほどの成長を遂げた新人看護師ひとり一人の成長を今後も支援し、永く温かく見守りたい。